

A 語句と読み

- (1) ただ／ただ～だけ / 「ただ口先だけで」と見下している
- (2) 弁舌 (言葉によるはたらき) / 秦との交渉で功を立てたことを指す
- (3) 朝廷で (秦王を) しかりつけた / 「廷」= 朝廷で、の意
- (4) もとの意味= のろい馬。転じて才能が劣ること / ここは自分をへりくだって言っている / ★相如の謙遜。あとの反語につながる
- (5) にくたんしてけいをおひ / 肉袒= 肌ぬぎ、荊= いばらのむち
- (6) (賓客を) 仲立ちとして・通じて / ×「そこで」ではない
- (7) ゆゑん／わけ・理由 / 「～する所以の者は」= ～する理由は

B 句法

- (8) 未然形 (「見」) に接続し、順接の仮定条件 (もし～たら) を表す。 / ★已然形+ば (～ので) との区別が頻出
- (9) 反語 (どうして～だろうか、いや、～しない) / 「独り～んや」= 反語
- (10) 部分否定。「俱には～ず」で「両方ともは～ない (どちらか一方しか生き残れない)」の意になるから。 / ★「俱に～ず

(全部否定)」との差に注意

- (11) 逆接 (～とはいっても・～けれども)
- (12) 「～する所以の者は、…を以てなり」= 「～する理由は、…だからである」。理由を述べる決まった言い方。

C 何を・誰を指すか

- (13) 藺相如
- (14) 廉頗と藺相如 (趙の二人の重臣)
- (15) 廉頗自身。自分を「いやしい者」と呼んでへりくだることで、心から詫げる気持ちを表している。

D 口語訳

- (16) 藺相如はただ弁舌だけで手柄を立てて、それでいて地位は私の上にいる。
- (17) 私が相如に会ったならば、必ずあいつに恥をかかせてやろう。
- (18) いま二頭の虎が争えば、その勢いからして両方とも生きてはいられない。
- (19) 国家の危急を先にして、個人的なうらみを後まわしにする

E 内容・記述（解答例）

- (20) 自分は戦場で大功をあげたのに、口先だけの相如が自分より上の位にいるという不満。(三十八字)
- (21) 二人が争えば趙が秦につけこまれ、国が危うくなるから。(二十五字)
- (22) 肌をあらわにして、むち打たれる覚悟でわびるという意味。「どんな罰でも受ける」という、最大級の謝罪を身体で示している。
- (23) 刎頸＝首を刎ねること。相手のためなら首を切られても悔いはないというほどの、生死を共にする深い友情のこと。

F 故事・文学史

- (24) 『史記』／司馬遷／紀伝体の歴史書（廉頗藺相如列伝）
- (25) 完璧（帰趙）／「完璧」の語源になった話
- (26) 負荊請罪（ふけいせいざい）／いばらを背負って罪をわびること

【現代語訳（全文）】

廉頗が言うには、「私は趙の将軍となり、城を攻め野で戦った大きな功績がある。藺相如はただ弁舌だけで手柄を立てて、それでいて地位は私の上にいる。」と。そして公言して言うには、「私が相如に会ったならば、必ずあいつに恥をかかせてやろう。」と。

相如が言うには、「そもそもあの秦王の威勢をもってしても、私は朝廷で秦王をしかりつけ、その家臣たちに恥をかかせた。私は愚か者だとはいつても、どうして廉将軍だけをおそれようか、いや、おそれはしない。いま二頭の虎が争えば、その勢いからして両方とも生きてはいられない。私がこのようにする理由は、国家の危急を先にして、個人的なうらみを後まわしにするからである。」と。

廉頗はこれを聞いて、肌ぬぎになっていばらのむちを背負い、賓客を仲立ちとして、藺相如の家の門まで行き、罪をわびて言うには、「いやしい私めは、将軍の寛大さがこれほどまでであると存じませんでした。」と。

とうとう互いに喜び合って、刎頸の交わりを結んだのであった。